
欠陥王女の廻る世は(仮)

神崎 錐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欠陥王女の廻る世は（仮）

【Nコード】

N1295Y

【作者名】

神崎錐

【あらすじ】

16歳の誕生日、私は交通事故で死んだ。

記憶を持ったまま転生した先は、ファンタジーな異世界。

……私は、何をすればいいのだろう。

『欠陥王女』として異世界に転生した、とある少女の物語。

P r o l o g .

むかしむかし……って、別に今もあるけどまあとりあえずね

あるところにレーゼトア王国という国がありました

その国は勇者を唯一召喚できる国として有名でした……

…今もだるとかは言わないでよ、こういうものだと思うって

その国の王族は王様と王妃様に王子様が二人と王女様が二人で、もうじき五人目の子供が生まれるということで、国民もみんな浮き足立っていました

あるとき、王妃様は何の前触れもなく三人目の王女を産みました

しかし、王様は王妃様の産んだ王女を見て、その異様さに思わず眉をしかめました

王女は、王様にも王妃様にも無い黒の髪と眼を持っていたのです
王女はその容姿で王様と王妃様、他の四人の兄姉たちをふくむ様々な人に嫌われました

そのうえ、王女には魔力が少しもありませんでした

王族の者であるにもかかわらず魔法がまったく使えないことで、王女にはすぐに『欠陥王女』という二つ名が付けられてしまいました
それからしばらくして、王女は誰にでも嫌われている自分に気づいたのでしょうか

あるとき、王女は王様にいました

自分を東の書庫の塔に住まわせてほしい、と
そこでなら誰も迷惑にはならないだろう、と
自分も本が好きだから、退屈して迷惑なことはしでかさないだろう、
と

王女は、自ら人を遠ざけることにしたのです

王様はこの王女の言葉に、二つ返事で了解しました

こうして、レーゼトア王国の城に開かずの間ができました

王様は新しい本が出たと知れば買い、魔法を使って開かずの間に本
を送り込みます

すべては、大嫌いな王女の興味を本だけに向けさせるために

欠陥王女は今日もまた、本を読み続けます

さて……今日はどんな本を読むのでしょうか？

F i r s t .

「……なにこれ」

私は誰に言うわけでも無く、つぶやいた。

私は本が大好きで、暇さえあれば本を読んで過ごす。

だから今日も、まだ読んでいない本を求めて本棚を物色していた。

そうしてしばらくして、見覚えのない背表紙の本を見つけた。

なんとなく気になり、本を手にとって椅子に腰掛けた。

本の題名は『魔物辞典』

こんなものまであるのかとすこし驚いて、何気なくページをめくると、そこには何故か一枚の紙が挟まれていた。

その紙に書かれていた文章を読んで、思わずつぶやいてしまった。

……いや、たしかに嫌われてたよ？

悪口を言われたし、魔法でよくイタズラもされた。

城の一部を崩壊させたとき、私がしたことに仕向けられたときもあった。さすがに魔法が使えないのにそんなことはできないということとで、すぐに嘘だとわかったらしいけど。

いや、たしかに私には魔力が無いらしいよ？

魔力の有る無しなんてわからないけど。
誰を見てもなにも違いなんてわからないし。

いや、たしかに『欠陥王女』なんて呼ばれたよ？
でもまさか悪口じゃなくて二つ名だったとは。

それからしばらくってどういうこと？

たしか私が王様にこの東の塔に住みたいといったのは四歳の誕生日
の前日で、むしろ早いと思うけど。

たしかに王様すごい乗り気で二回も了解してたよ？

この国の法律のせいで私を殺せないから、視界に入らなくなるだけ
でも嬉しかったのかもね。

てか王様なにやってんだ。

見馴れない本がよくあるのはこのせいかな。

いつのまにか本棚増えてるのはこのせいかな。

いくら魔法でどうにかなるにしても、限界がくると思っただけど。
実用的な本があるのは嬉しいけど。

……てかなんで知ってるこの文書いた人。

私はこの塔に住むと同時に死んだことになっているはずなのに。
生きてることを知っているのは王様だけのはずなのに。

なんで王様が二つ返事で了解したことまで知ってる。

あときは王様がちゃんと人払いをしていたのに。

なんで開かずの間に私が住んでいることを知っている？

いや、そもそもこの人はどうやってこの本に紙を挟んだ？

この人は一体、なんなんだ？

「わかんないな……」

また小さくつぶやいて、再び紙を見る。

そこには、あいかわらず飾り気の無い黒い文字が書かれている。

……このことは、もう気にしないようにしよう。

もともと私が知る情報はとても少ない。

へたな詮索は、するだけ無駄というものだ。

私はそう考えて、改めて本を読みだした。

レーゼトア王国の城には、開かずの間がある。

以前は書庫だった東の塔が、開かずの間だ。

この国のものでなくても、知る人は多い。

だが、そこは依然として『開かずの間』だ。

誰も塔には入れないし、誰にも塔は壊せない。

塔に入ることができるものは、塔に入るためだけの『鍵』を持つものか『鍵』の所有者が許可したものだけだ。

しかし、『鍵』が紛失してしまったため、誰も東の塔に入ることとは叶わなくなった。

かくして、東の塔は『開かずの間』となったのだった。

Second .

私は、この世界に生まれてくる前の記憶がある。

この世界とは違い魔法も精霊も魔物も魔王も無くて、かわりに科学がある世界。

私はその世界で、学生として普通に生活していた。

朝早くに起きて朝食をすませてから学校に登校し、学校が終わったらしばらく図書館に居座って本を読んでから帰る。

私は一見して変わらないようで少なからずとも変わっていく日常の中で、死んだ。

交通事故だった。

私は、向かってきたトラックに動くことができなかった。
なすすべもなく、私はそのまま跳ね飛ばされた。

体は見事に宙を舞い、私の記憶はそこで途切れた。

こうして、私は齢16にしてこの世界を去った。

この世界に転生してきてからは言語の違いに焦ったが、冷静に分析するとこの世界の言語は前の世界で完全にマスターしていたロシア語に似ており、三歳になる頃には普通にその世界の本を読めるほどになっていた。

幸い、私の兄弟達は四歳になる頃にはすでに大人の読むような本が読めたらしく、私がそこまで目立つということにはなかった。

まあ、いつのまにやら『欠陥王女』なんて二つ名をつけられていたようだが。

「……今思い返してみても、あきらかに嫌われてたな……私」

小さく独り言を漏らして、私は何気なくポケットに手を入れて小さな鍵を取り出した。

妙に古ぼけた感じのその鍵は、鎖をつけてペンダントとして首から吊り下げられる形になっている。

私が王様からもらった魔道具とやらで、たしか名前は『塔主の鍵』といったか。

色々と説明をしてもらいはしたが、ようはこれがないとこの塔には入れないらしい。

少し眺めてまたポケットに入れ直して、こんどは窓を見る。

この窓は変わっていて、中から外を窺うことはできるが、外からは中がわからないというまるでマジックミラーのようなはたらきをする。

そのため窓から私の姿が見えることも光が外に漏れることもないので、この塔はいまだに無人だと思われるようだ。

「……久しぶりに、出掛けようかな」

なんとなくポツリとつぶやいて、私はクローゼットを見る。

最初にこの塔から出たのは7歳の頃だったか。

できれば一生、この塔から出ないようにしようという考えは、わずか三年で取り消した。

きっかけは、風邪をひいたことだった。

この塔はもとは書庫として使用されていたこともあり、人が生活するうえで必要なものがほとんど無い。

例えば風呂や調理場、ベッドなどといったところか。

洗面所はあったので、そこで風呂のかわりに適当な布で体を拭いたり洗濯物を洗えたのでなんとかなった。

調理場はなくても、時間が来るといつのまにか料理が届いてくるので困りはしなかった。

ベッドが無いのは少し困りはしたが、結局クローゼットの中の毛布を体に巻き付けて椅子の上で寝ていた。

だからかもしれないが、私はいつのまにか風邪をひいていた。

自分以外は誰もいないこの塔で、私は独りでなんとか風邪を治した。

そのとき、ふと考えた。

これが風邪じゃなかったら死んでいたかもしれない、と。

私は死ぬのは嫌だったから、薬がほしいと思った。

でも、ここに薬はない。もらえるあてもない。

この世界の地図も暗記済みで迷うこともないだろうし、ダメなら自分の知識でどうにかできるだろうと考え、私は外に出た。

今でも少し無謀だったとは思いはするが、後悔はしていない。

椅子から立ち上がり、クローゼットからとても簡素な麻のズボンとシャツを二枚ずつとサラシを一枚と皮の手袋と靴をひとつずつ、そしてだいぶ前に道中で購入した魔術師御用達という黒いフード付きのマントと自作の仮面を引っ張り出す。

それらをすべてアイテム袋に（冒険者御用達の小さな袋。大抵のものが入り、入れても重さが変わらない魔法の袋）入れて、次はこの城の侍女の服と瓶に入った薬を取り出す。

そしてその場で侍女の服に着替えて先程まで着ていた服と鍵をアイテム袋に入れる。

これで出掛ける準備は万全。

あとは薬を半分だけ飲んで、この塔の隠し扉から外に出るだけだ。

出掛けるのはこれで何度目だったろうか。

なんにせよ、一度出掛ければ最低でも一月は帰ってこない。

少し寂しく思いながら、私は薬を半分だけ飲んだ。

半分だけ薬が残った瓶をアイテム袋に入れ、待つこと数分。

私の髪と眼の色は黒から薄茶色になった。

「……いつてきます」

小さく塔に別れを告げ、私はまた、外に出掛けた。

Third .

「つ、疲れた……」

私は思わずそうつぶやいた。

ちなみに、私は今あの城の城下町の広場にある共同トイレにいる。

普段は使用者で溢れかえる場所だが、あいにくと今は真夜中。誰にも気付かれる心配はない。

ここはこういう暗い時間帯だと本当に誰もいないので、着替える場所として重宝している。

しかし、ここに来るまでの道のりで何があるかはわからない。

もちろん着替えてからの道のりも気をつけるにこしたことはないが、ここに来るまでの道のりはとくに慎重にしていたのだが……城内で声をかけられてしまったのだ。

それもかなり身なりのいい男性に。

侍女の格好をしているとはいえ、こんな真夜中に出歩いていたら誰だって不審に思うだろう。

幸い、この城の人じゃなかったのだからなんとか言いくるめることができたが、できればもう二度と人に見つかることは避けたい。

……嘘をついてしまったのが少し心苦しい。

暗かったので相手の顔がよくわからなかったことから、おそらく相

手も自分の顔がよくわからなかったと思われる。
というより、そうであってほしい。切実に。

「帰る頃には、もういないといいけど……」

願望混じりにそうつぶやいて、私はアイテム袋から麻のズボンとシヤツと、皮の手袋と靴をひとつずつ取り出した。

それから侍女の服と少し華奢な靴を脱いで、先程出した装備をすべて身に付けて脱いだ服と靴をアイテム袋にしまう。

この時点で、改めて自分の容姿を確認してみる。
そこまで確認する理由はないが、しいていうなら気がむいて。

少し後ろを見ると、腰まである自分の長い髪が見える。

髪の色を確認すると、もう薬が切れたようで薄茶色から元の黒色に戻っている。このぶんだと眼も黒色に戻っているだろう。

体は、胸にサラシをつけていること（出掛けようと思い立つ前からつけていた）と身長が155セルク（1セルク＝1cm）と微妙な身長も手伝い、よく見ても男か女か判別しがたい非常に曖昧な体型になっている。それこそ、顔を見なければわからないだろう。

そのことを確認して、私はアイテム袋からマントと仮面を取り出して身につける。顔と髪はこの二つで隠し通すつもりだ。

私にとっては不審者にしか見えないこの格好だが、そういう目で見られたためしがないためおそらくそう珍しくもないのだろう。

……いまだにこんな格好の人は他に見たこともないが。

そんな風に考えを巡らせていると、ふと大切なことを思い出した。
まあ、大切といってもたいしたことではないが。

着替えるために棚の上に置いておいたアイテム袋に手を入れ、
中から飾り気の無い黒っぽい金属製の首輪を取り出す。

この首輪は『偽りの独奏』という魔道具で、着けたものの望み通りの
声を周りの人に幻聴として聞かせるという代物で、私にとっては
声を楽に変えることができる便利品になる。

ちなみに前のお出掛けのときに露店で購入した。

つけるのは初めてでよくわからなかったが、どうやら杞憂だったよ
うで普通につけることができた。

これで着替えは終了だ。

アイテム袋を懷にしまい、共同トイレを出る。

月も無い真夜中では黒いマントは姿が隠れやすく、警備に見つかる
こともなく町を出ることができらるだろう。

おそらく一番目立つことになる仮面と首輪をフードで引っ張って隠
しながら、私は歩を進めた。

Third. (後書き)

長さの単位一覧

1 ムルク	1 m
1 セルク	1 c m
1 ルルク	1 m
1 キルク	1 k m

Fourth.

あれから、私は何の問題もなく町から出た。

警備はもともとやる気がなかったようで、注意力が散漫になっていた。……できれば、もう少し真面目に仕事をしてほしいものだ。

町から出ると草原が広がっており、そのむこうには深い森と山が見える。まだ夜が明けていないが、暗いうちに町を出ておいたほうが私には都合がいいのでそのまま薬草採取ついでに深い森に入ることにした。

普通の人なら魔物の活動が活発になる夜に、それも草原よりも遭遇しやすい森に入るのは自殺行為となるが、私はその普通に該当しないため、あまり心配はない。

暗い森の獣道を、ゆっくりとした足取りで進んでいく。

時折木々の隙間から見える小さな星空を見ながら薬草を探していると、空の色が変わらないのに少し周りが明るくなってきた。

どうやら森の中で薪を焚いてているらしく、獣道から少し外れたところから赤っぽい光が見える。

おそらく冒険者なのだろうが……なぜだろう。

あそこにいる人が、すごく嫌な目にあう気がする。

おそらく気のせいではないこの予感を伝えるべく光の方向に足を進めていると、だんだんと話し声が聞こえてきた。

……いや、話し声にしては少しばかり大きすぎるか。

なにせよ、無用心ではあるが。

小さくため息を吐きつつさらに近づくと、木々がなくなって少し広めの空き地のようになっている場所に出た。

光源となっている焚き火はその空き地の中心にあり、焚き火を中心に魔物避けの魔法陣が描かれている。…あの巨大な生肉については気にしないことにしよう。冒険者は二人いて、その中で話し合っていた……というより、討論をくりひろげていた。

どうやら魔物の倒し方について言い合っているようだが、とりあえずその話はぶっ千切らせてもらおう。

「すみません、そこのお二方」

「!？」

「!？」

そう話しかけると、とくに声が大きかったほうの冒険者は身の丈大の大剣を、もう一方の冒険者は禍禍しい形のナイフをつきつけてきた。……どうでもいいけど、このナイフ、どこで売ってたんだろう。

「貴方はなんですか？何をしにこの森に？」

目が笑っていない笑顔でナイフをつきつけてくるナイフさん。

(とりあえず武器名を名前として呼ぶ)

一方、さっさと魔法陣に引き返していこうとする大剣さん……ってあれ？……あれはもしか……

「おい、さっさとナイフしまえよ。怯えてるじゃねえか」

「なんで仮面ごしでそんなことわかるんですか。おかしいでしょう」

「勘だよ、勘。それに、そいつまだガキじゃねえか」

「ガキかどうかは関係ありません。ようはこの森で真夜中にたった一人でいることがおかしいんです」

「あの………すみません」

「ああ？なに言ってやがんだよ。そこら辺のガキでも草原にたむろしてるぐれえのヤツは棒切れで倒すぐれえはできるだろ？」

「それはあなたの家が特殊なだけです。普通は絶対無理ですよ」

「なんだと！？」

「あの………ちよつといいですか？」

「「何だ」ですか」

「（………意外と仲良いな、この二人）ただのお節介かもしれませんが………早く逃げたほうがいいですよ」

「いや、お前が言うことか？」

「そうですよ。この森は未熟な魔法使いがうろついていたいい場所ではありません」

「私はある意味特殊なので大丈夫です。……ついでに言うと、私は魔法使い見習いですらありませんよ。このマントは露店で購入したんです」

「うそつけ。魔法使いのマントが露店で売ってるわけねえだろ？」

「なんでそんな下手な嘘をつくんですか？もしかしてわけありとか……」

「（……なんでこんな即効で否定されるかな……）ああ……もうなんでもいいから早く……あ。」

「どうした？」

「やっと自らの非を認めたんですか？」

「……あゝあ。一応、忠告はしましたからね。」

「……私はもう、知りませんよ……」

「はあ？どういふこと……ってうわあああああああ！！？」

あ、ナイフさんがさらわれた。

「な、なんだ！？一体なにが……………ってギヤアアアアアアア！
」

あ、今度は大剣さんがさらわれた。というかあの状況で武器手放さないって大剣さんすごいな。

香気に人がさらわれているところを見ると、魔法陣の周りにはいつのまにか五羽ほどの巨大な鳥がいた。

あれが大剣さんとナイフさんをさらった犯鳥で、『サイレントバード』という夜行性の怪鳥だ。音をさせずに飛ぶことができるため、大抵の人は狙われていても気付かない。

私が気付けたのも、一瞬だけだが姿が見えたからだ。そのことがなければ気付くことはなかっただろう。

「……………あ、薬草」

魔法陣の周りをうろつろしている『サイレントバード』から目を横に向けると、そこにはたくさんの薬草が生えていた。

これ幸いと早速懐のアイテム袋から草刈り鎌を取り出すと、私は『サイレントバード』の隣で手際よく刈り取っていった。

薬草を50本と毒消し草を20本ほど採取して草刈り鎌と一緒にア

アイテム袋にいった時点でふと顔をあげると、いつのまにか10羽に増えていた『サイレントバード』がじっとこちらを見つめていた。

なにか用でもあるのだろうか……ああ、そういうことか。

心の中でそうつぶやくと、私は立ち上がった魔法陣に近づき……魔法陣の一部を消した。これでもう魔法陣としては使えない。

おそらく、火を消したくても魔物なので魔法陣の中に入れないので私に視線で訴えかけていたのだろう。それか魔法陣の中にある生肉目当てで。

「これで入れますよ」

「私にはこれ以上のことはできません。あとは好きなようにどうぞ」

私はそう言っ胸に手をあて、恭しく頭を下げた。

ちなみに、お辞儀のときに胸に手をあてるのはただのクセだ。

しばらくして頭をあげると、すべての『サイレントバード』があきれたように口を開けていた。

……あれ？やっぱ変？

F i f t h .

私がおかしな行動をしてしまっってから約10秒後、沈黙が痛いなくと考えていると、10羽の中で一番大きかった『サイレントバード』がポカンと開けていた口を閉じ、また開いた。

「お前が『無価値』か？」

……しゃべったことにはあまり突っ込まないでほしい。この世界の生き物は、総じて人語を解すことができるのだ。……まあ、このことを知っているのは私ぐらいなものだろうが。

それにしても、ずいぶんな呼ばれようだ。彼らにとってはそのとおりなのだが。

「そうですね……確かに私はあなたがた魔物にとっては『無価値』でしょう。本当に、そこらにある小石ほどの価値もない。まあ、同族にとっても私はほとんど『無価値』でしょうが」

少し衝動的にそう返事をしてから、皮肉っぽくなってしまったかもしれないと少し後悔した。できれば、悪い印象も持たれること無く立ち去りたかったのだ。

顔に出さないように（私のつけている仮面は顔の上半分だけを隠すタイプだったので、口元に気を付ける必要があった）そう考えてい

ると、不意に先程問いかけてきた『サイレントバード』が何かを言っているのが聞こえた。つぶやき程度の大きさだったのでよく聞こえなかったが、おそらくあちら側にも伝える気はなかったと信じた。い。

「それでは、私はこれで失礼します。それでも、時間があまりありませんから」

私はそう別れを切り出し、再び頭を下げた。少し強引かもしれないが、急いではいなくても時間があまりないことは事実だ。少ししてから頭をあげ、そのまま『サイレントバード』達に背を向けてつい先程まで通っていた獣道にもど……

「待て」

……れなかった。できればそのままほっといてくれるとよかったのだが。背を向けたまま小さくため息をつく、私は振り返って呼び止めてきた『サイレントバード』を見据え、問いかけた。

「なんでしょうか？」

「お前の名はなんだ？」

問いを問いで返された……というより、名前訊かれたよ。どうしよ

うかな。本名名乗るわけにもいかないしね。

「私が普段名乗る名でよろしければお答えしましょう。
私の名は、デー。姓はありません」

暗に本名ではないと仄めかした風に名乗る。

実際、本名を名乗る気はない。一応は本名の一部を使用しているのが偽名というよりもあだ名といった方が正しいのかもしれないが。

「……なるほど。『無価値』のデー……か。わかった。
俺はカイ。姓はスパード」

…名乗り返された。…姓と一緒に。というより魔物にも姓があることに驚いた。名前ならわかるけど。

……というか最初のつぶやき聞こえたよ、普通に。なんだその言い方は。もしかして私は魔物にそんな風に呼ばれてるとか？そういえばお前『が』って言ってたけど……二つ名が増えたな。不名誉な感じのが。思わず明後日の方向を見かけてしまった。

「……ご丁寧にありがとうございます、カイさん。それでは、私はこれで」

「ああ、またいつか」

その『またいつか』ができれば限り無く遠いことを願いながら、私は獣道に戻っていった。……いや、なんか物凄く嫌な予感がしてね？

今日は何故か、異様に疲れる日だった。しみじみとそう感じながら上空を見上げると、所々木に隠された空が白んできている。もうじき夜明けだ。

まだ森から出ていないが、目的地は定めるべきだろう。今更ながらにそんなことを思い立ち、頭に地図を思い浮かべる。城下町から草原を隔てて森に入って、それからだいたい西に7キロトは歩いたから……おそらくこのまま進めば今日中には隣国のアーシエス国に入ることができるだろう。

いつもの行動の範囲は国内だったので、これを期に国外まで足を伸ばしてみよう。幸いなことに、アーシエス国には冒険者ギルドが数多く存在している。そうそう目立つことはないはずだ。

そんなふうに一通り考えをまとめた。
この調子だと、今回も長いお出掛けになりそうだ。

あくびを噛み殺しながら、未だに暗い森の中を歩く。
森を出たら少し昼寝をしようかと考えながら、私はただひたすらに獣道を歩き続けた。

S i x t h .

「ハア……」

私は森の中で、小さくため息をついた。

もうすっかり日は落ちていて、ただでさえ暗かった森の中はさらに暗くなっていた。今夜は月が出ているので昨日よりは明るいようだが、木々に遮られていたのであまり意味がなかった。

「まさか地図が間違ってたなんて……」

そう。

なぜ私が未だに森にいるかというと、なんと東の塔で覚えておいた地図が間違ったものだったのだ。

それで丸一日では森を抜け出すことができず、結局二日目（予定）に突入してしまったというわけだ。

……後で地図買って覚え直さないとな。

「……ハア」

再びため息を漏らしながら、アイテム袋から干し肉を二枚と水の入った瓶をひとつを取り出す。すこし少ないが、これが夕食だ。

それから固い干し肉を水を飲みながらなんとか完食すると、次は寝

床の問題が浮上してくる。

どこに寝ようかと結局獣道を再び歩いていると、空の色が変わらないのに少し周りが明るくなってきた。

……ちよつと待て。なんか昨日もあつたぞこのパターン。

そしてやっぱり絶対に気のせいじゃない嫌な予感がする。

「……行くか」

ため息を吐きなくなるのを少し抑えて自分自身に言い聞かせるようにつぶやくと、私は光の方向に足を進める。

それから徐々に近づいていくにつれ、話し声が聞こえてきた。

……どうしよう。すごく聞き覚えがある。

とりあえず頭の中で不安要素に蓋をしてからさらに近づいていくと、案の定昨日とほとんど同じ状態で大剣さんとナイフさんが討論していた。

今回の討論の内容は……私だった。やっぱりなあ……。

物凄くいやだけど、（面倒事の前感しかないから）とりあえずその話はまたぶつ千切らせてもらおう。

「すみません、そこのお二方」

そう話しかけると、今度は二人とも無言で武器をつきつけてきた。想定範囲のため、驚きはしない。むしろ当然の行動だろう。

「あなたは何者ですか？」

……これは少し難しい質問だ。できることなら嘘をつきたくはないし……

「そうですね……通りすがりの警告者……とでもいっておきましょうか」

「警告……？ いったい何を知らせに来たんだ？」

「真に受けるんじゃないやありません。こんなの嘘に決まっているでしょう」

「でも話聞くぐれえはいいいんじゃないやねえのか？」

こいつが本当に賊の類いならこんな無防備なのもおかしいし、魔物にしたって全然魔力を感じねえぞ。

だいたい、本当に賊か魔物ならあんな状況でじっとしてるか？ 普通なら我先にと逃げ出すのが関の山だろう？」

「ぐっ……」

あ、大剣さんがナイフさん説得してくれた。ありがとうございます。

ちなみに先程の話に備考をつけると、実は『サイレントバード』という魔物はこの森の中でも二番目くらいに強かったです。

だから人型に変身できるくらいの魔力がある魔物も大抵は戦いを避けるんです。まあ始めから人型の魔物もいるけど……この森にはたしかいないはずだから除外。

……というより、よくそんなのから逃げられたなこの二人。

「で、警告ってどういうことなんだ？」

「……まあ、そうですね。とりあえず火を消してください。」

「それで？」

「それだけです」

「……………」

「……………」

「（沈黙が痛い…………）…突然ですが……『グランドスネーク』をご存知ですか？」

「…なぜいきなりそんな話になったのかはわかりませんが………知っていますよ。一晩で国を滅ぼしたという有名な魔物ですね」

「……………」

「実は、その有名な魔物はこの森で眠っているんですよ。」

「……はぁ!!?」

「ちなみに、あの山脈が『グランドスネーク』が擬態した姿です」

「ほとんど目の前じゃねーか!」

「『グランドスネーク』はこういう環境の変化に敏感に反応して起きやすくなり、今まではここに住んでいた魔物がこういう火を消していたんですが……こうなっていると無理ですからね」

「よし、今すぐ消すぞ!」

「氷魔法を……」

「あ、消すなら水をお願いします。それも環境の変化に含まれてしまいますから」

そんなこんなで10分後。

「おし、消えたな」

「よかったです」

「……消火をしたの私ですよ」

「細かいこと気にするんなよ。老けるぞ？」

「誰のせいで……！」

「（やっぱりこの二人、意外と仲良いなあ……）それでは、私はこれで。さような……」

「「ちょっと待った」」

ガシツと両肩を別々の手で掴まれる。

……なんとなく予測はしていたが、やはりおとなしく逃がしてはくれないようだ。そつとため息を……

「……あ」

「なんですか？またなにか……」

「どうした？何かいたの……」

……「ゴゴゴゴゴゴ」……

「……私の錯覚かもしれませんが……あの山脈、動いてませんか？」

「……」

「……」

「……………とりあえず……………逃げましょうか。今のうちなら目が覚め
きっていないので……………早くこの森を抜け出せば、なんとかなるかも
しれません」

「……………そうですか……………そうとわかれば、さっさと逃げますよ!」

「当然だ!こんなところで死んでたまるか!!おい、お前もボケッ
としてねーでさっさとこい!」

「ちょ、私は関係な……………うわああああ!!」

こうして私は大剣さんの肩に担がれ、あっというまにさらわれてい
ったのだった。……………なぜこうなった。

S e v e n t h .

そして夜が明け……早朝。

やっと着きました、アーシェン国。

まあ、まだ村にも着いてませんが……え？あの二人はどうしたって？

えっと……まあ、結論から言いますと……逃げ切れませんでした。

やっと森から抜け出せる！っていうギリギリのところで偶然出っ張っていた木の根に引っ掛かり、二人とも盛大に転びました。

私は大剣さんが私を担いだまま転び、そのはずみで本当に偶然森の木に当たらずに森の外に投げ飛ばされました。

で、なんとか受け身をとってから森の方を見てみると……つい先程私が（投げ飛ばされて）出てきた獣道がありませんでした。

あれ？なんで？と少しテンパって、落ち着こうと深呼吸していたとき、ふとあることを思い出しました。

……そういえば、『グランドスネーク』ってこの森最強だったっけか……ん？強い魔物の特権って確か……

そこまで思い出して、森の遙か向こうから沢山の断末魔が聞こえてきました。

記憶が正しければ、おそらくこれは『ゴブリン』の断末魔でしょう。

これらの情報から推測して……おそらく、二人が転んだのは偶然ではなく、『グランドスネーク』が『ムーブウッド』に命令し、故意に転ばせたのでしょう。

強い魔物は自分より幾分か弱い魔物に主従関係を結ばせて、その魔物に何時でも何処でも命令できるようにできますからね。

何でこんなタイミングかというのは、おそらく完全に目が覚めて空腹を認知し、命令に至るまで時間が掛かったから。

そして『ムーブウッド』が出口を完全に隠す。

ついでに二人が起きあがるまでに道を変えておけば、もう出口はわからなくなるという寸法な訳です。

『グランドスネーク』は自分がしなくてもいいと思う事は絶対にしようにしません。

（この事は森を歩いていたときに世間話をしていた『ゴブリン』からたまたま知ることができました）↑盗み聞き

まあ、ようは面倒がりなわけですね。

本当にこの話の通りの性格だとすると、大昔に国を一晚で滅ぼしたという話もよっぽどのがあったのではないのでしょうか。

まあ、その話は置いて。

つまり、私が言いたいのは『ゴブリン』の断末魔はおそらく『グランドスネーク』に命令されて二人を襲って、返り討ちにあったものではないかということです。

声が出口から遠かったのは、『ムーブウッド』に騙されて誘導されたといったところでしょう。

そして私はそもそも武器なんて物すら持っていないし、魔力も無いし、周囲には誰もいない。

結論……………二人の救助は不可能。

というわけで、どうしようもないのでとりあえず村に行こうとあてもなくさまよっているうちに…………夜が明けたというわけです。

最初にやつと着いたとは言ってみましたが、実のところ、森を抜けた時点で既に国境は越えていたんです。

ただ、夜が明けて改めて実感しただけ…………というわけですね。

おそらく私が今こうしていられるのはおそらく、偶然か、『グランドスネーク』の性格か、私の他の人とは違う特殊な体質のおかげでしょう。

「…生き残つてるといいな…………あの二人」

小さく希望を呟き、既に遥か遠くにある森を振り返る。

森に囲まれるようにしてあった山脈は、もう無くなっていた。

あの山脈が魔物だったことを知らない人は、大騒ぎするだろう。

とうの『グランドスネーク』にとっては、自分の場所の特定を困難にするために別の姿になっただけなのだろうが。

もう一度森に背を向け、歩を進める。

また眠ることができなくて正直かなり疲れが溜まってたが、どうしても眠る気にはなれなかった。

どこか村に着くまでは、休憩もせずに歩き続けるつもりだ。

まあ、元々所持金が非常に少ないため、村に着いても野宿は現実だろうが。

「逃げられるかな……？」

あの二人の悲鳴が聞こえないことを静かに願いながら、私は空を見上げた。

…視界の端にチラリとカイさんの姿が見えたのは、きっと気のせい……

「……………痛!？」

途端に、頭に何かが衝突。

痛む頭を擦りながら拾って確認すると、それは……………見たこともない紋章のようなものが彫り込まれた…指輪だった。

続きまして第二弾。

こちらも見事にクリーンヒット。

そんな恨み持たれるようなことした記憶無いのにな……と思いながら第二弾を拾い上げると、それも指輪。デザインが違っけど。

二つの指輪を交互に見比べる。

……ん？これは……紙？

頭の痛みであまり指先の感覚を意識していなかったので気付かなかったが、指輪には二つとも紙がくくりつけられていた。

「？なんだろう、これ。えっと、なにになに……？」

『やる。』

ソマロ・カイ・スパード ↑ 第一弾

『同じく。』

エルシド・グランス・ラシエントル ↑ 第二弾

………まてまてまて。

これはどういうことだ。

何故今になって真名を教える。しかも手紙で。

というより魔物にも真名、名、姓の三段階分けあったんだね。初め

て知ったよ。（どれを教えるかにより、相手の自分に対する親密度が測れます。ちなみに、デイーは名の短縮）

いや、それよりも確か『サイレントバード』って夜行性の筈。何で朝っぱらから飛んでたんだ。もしかして本当は何時でも飛べるけど夜の方が色々と楽だからとか……ありえる。

というかグランスって誰。多分カイさんの知り合いだろうけど……普通は会ったこともない相手に真名まで教えるのはやりすぎだと思う。

二つの手紙を洗い顔をしながら交互に見比べていると、唐突に、気付いてしまった。

……………この二つ、それぞれ筆跡が違う……？

このことから考えられる可能性は一つ。

おそらく、カイさんもグランスさんも、人に変化できるほど魔力があるのだろう。……まあ、文字が書いてある時点でどっちかが擬人化して書いていることはわかってたけど……二人ともだったとは。

→魔物の姿は、文字を書いたりするような精密動作に適さない。ちなみにこれも盗み聞き情報。一応、ある程度強い魔物なら文字も読めるそうです。

再び上空を見上げ、鳥の影がないことを確認して大きく溜め息を吐き、アイテム袋に手紙と一緒に指輪を二つともしまう。

そして私はまた森に背を向け、その場から立ち去った。

…… いたい、どういつ指輪なんだろう。

些か疑問は残ったが、結局、今まで詰め込んできた本の知識を全部引っくり返しても、答えがでることはなかった。

S e v e n t h . (後書き)

真名とは言いますが、別に知られたところでどうこうなるわけでは
ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1295y/>

欠陥王女の廻る世は(仮)

2011年12月1日19時38分発行